HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 20世紀の宗教研究における男性中心主義を暴くフェミニズム研究の再考 ： C.P.クライストを中心に |
| Author(s) | 鄭, 君達 |
| Citation | 北大宗教学年報, 2, 1-10 |
| Issue Date | 2019-08-31 |
| DOI | https://doi.org/10.14943/90374 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/75427 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | hil_reli_2-1.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【研究ノート】

# 20 世紀の宗教研究における男性中心主義を暴く フェミニズム研究の再考 ―C.P.クライストを中心に―

鄭　君達

## Ⅰ．序論

20 世紀のフェミニズム研究は、男性中心主義というキーワードに焦点を当てた。そして宗教研究の領域でも、同じような潮流がみられる。当時、フェミニストの神学者たちは、各自の領域において様々な研究を行い、宗教あるいは宗教研究に潜在する男性中心主義の問題を暴きつつ、女性の権利と自由を求めるために多彩な研究成果を実現した。例えば、R.R.リューサー、E.シュスラー＝フィオレンツア、R.グロスと J.プラスコウのようなフェミニスト神学者たちは、自分たちが持つ宗教伝統を中心にして、そうした伝統を記述する聖典に隠された男性中心主義を分析した。そして、そうした聖典に埋めこまれた、女性を自由に導く啓示性を発見するよう、努力した。そのほか、C.P.クライストのようなフェミニストの神学者は、先史時代においての女神崇拝の研究に専心した。女神崇拝に関する問題は、今までの宗教研究において関心を集めた一つの重要なテーマであり、宗教研究における男性中心主義を検討するときに、その男性中心主義に潜在する暴力を暴けるかどうかを左右しうる重要な議論でもある。したがって、今日のフェミニズムの議論にとって基礎になった 20 世紀の宗教研究を考察するときに、女神崇拝を検討する意義があると思われる。

そこで、本稿では、フェミニスト神学者である C.P.クライストの宗教研究における男性中心主義に隠された暴力について考察することによって、20 世紀のフェミニズム研究の貢献を再考し、そうした議論が形成された原因と問題意識、さらにその限界を考察する。

以下では、まず、生成期から 20 世紀までのフェミニズムの発展史をたどり、主に宗教研究の視点から議論の問題意識をここで可視化する。次に、20 世紀のフェミニズム宗教研究における男性中心主義に対する批判に注目する。ここでは、男性中心主義という概念の形成と、本稿の中心になる研究者のクライストの研究を紹介したい。そして、クライストの議論を検討しつつ、その議論から見出された有効性と限界を検討する。

## Ⅱ．本論

### 一、19 世紀から 20 世紀までのフェミニズムにおける研究視点の変換

フェミニズム研究の視点は長い歴史の中でかなりの変化を経験した。フェミニズムという用語は、18 世紀の欧米で初めて登場した。初期のフェミニズムの潮流において、それは「女性の自由・平等・人権を求める思想」として定義された、近代自由主義思想の産物である(大越、1996；8)。当時、女性の権利を求める思潮がいくつか登場した。例えば、フランス革命の『人間宣言』(1789)の影響下で、「女性と市民の権利宣言」(1791)を作成したオランプ・ド・グージュは代表の一人である。そして、リベラル・フェミニズムを代表したイギリスのメアリ・ウルストンクラフトは、彼女の主著『女性の権利の擁護』(1792)において、男女不平等社会の不合理性を、ロック以来のイギリス合理主義の立場から批判した(大越、1996；34)。

そして、女性が自分たちの権利を守り、自由と平等を追求する思想は、何世紀にもわたってフェミニズムの歴史の中で様々な形で提示されている。その中でも、「女性」と「暴力」という 2 つのキーワードに関する学術研究に焦点を合わせなければならない研究分野の 1 つが宗教である。宗教における女性に対する暴力の問題は、常にフェミニズムの注目の的となっている。例えば、女性の身体と精神をコントロールする暴力的な宗教原理主義に抗する女性たちが組織化した運動体である WAF(Women Against Fundamentalism)の形成(川橋、2016；12)、あるいは、宗教儀礼による女性器切除に引かれた女性に対する暴力の問題など、フェミニストたちは、宗教における暴力性について、さまざまな議論をした。

しかし、フェミニズムが 20 世紀以降に発展すると、問題関心も変化していく。フェミニズム思想批評の最前線で活躍する学者の大越愛子は、1996 年刊行した『フェミニズム入門』という本の中でフェミニズムの歴史的展開を簡潔にまとめた。

> 第二期において、フェミニズムは、近代思想の男性中心主義との対決を試み、独創的な理論を次々生み出したが、女性という性別を実体化する傾向を脱皮できず、結果的に男性／女性の二元論的枠組みにとどまったことになる。第三期において、性別二元論を固定した近代思想それ自体を批判している点で、フェミニズムは、近代主義から脱皮する思想として性格を鮮明にしつつある。それゆえ、それはしばしばポストモダン思想との類縁性を指摘される（大越、1996；13)。

大越のまとめから見ると、フェミニズムの第二期(20 世紀)では、フェミニストは単純に自身の権利と自由の追求から、女性が男女の二項対立から家父長制の優位性をどのように

打ち破るかを議論することへと徐々に移行してきたという、問題意識の変化がわかる。さらに、第三期のフェミニズムでは、すでに男女二元論を批判しつつあり、新たな「構築的暴力」(大越、2010；403)に抗する理論も形成されている。この時期において、男性中心主義の優位性とその原因になる二項対立の影響に注目した研究者は何人もいた。例えば、男性中心主義の形成の原因を検討した文化人類学者のシェリー・B・オートナー（1972）は、男性・女性を文化・自然と比較して、女性が男性より一般的に低いと考えられる理由を明らかにした。そして、エリアーデの研究に潜んだ男性中心主義を批判したフェミニストである歴史学者の C.P.クライスト（1991）は、先史時代に存在した女神崇拝に焦点を当て、議論を展開した。

## 二、宗教研究における男性中心主義を暴く

### 1. 宗教研究における二項対立の形成

まず、男性中心主義の視点はどのようにして形成されたのかという問題をさらに明らかにしたいと思う。ここでは、二項対立の概念と、この二項対立の概念から形成された女性に対する軽蔑の論理を考える。ここでは、文化人類学者シェリー・B・オートナー(Sherry Ortner)の論述を検討する。オートナーは、“Is Female to Male as Nature Is to Culture”(1972)という論文で、男女の二項対立から見られる、文化に根ざしている女性の従属の普遍性について論じた。初期、二項対立の観点を宗教研究の立場から論じた学者の一人は、フランスの社会学者のエミール・デュルケームである。その後、「聖と俗」の二項対立の観点が深化し、フランスの社会人類学者レヴィ＝ストロースは、二項対立の文化的な論理に関して説明を提供した。そして、「オートナーは、ジェンダーイデオロギーが人間の認知の一部として機能しているかの実証に着手し、権力の違いと、男性の優位性を支持するために二項対立がどのように機能するかを強調した」(Darlene Juschka、2001；57 [筆者訳])。つまり、オートナーの宗教研究では、男性と女性の二項対立の関係を、男性が女性を支配し、男性が女性より優れているという強力な証拠であると理解した。そして、それを自然と文化の二項対立と比較し、女性の従属の普遍性をさらに明らかにした。

“Is Female to Male as Nature Is to Culture”(1972)でオートナーは、自然と文化の区別は、女性と男性との比較として見ることができると示唆した。彼女によると、人類は宗教儀礼の実践を通じて、汚辱(pllution)という概念を清浄(purity)から区分した。さらに、そうした宗教儀礼こそ人類の知恵を示す文化の表現であると論じた／表現した(オートナー、1972；66)。したがって、「ある程度の意識では、文化は、自然とは異なるだけでなく、自然よりも優れていると主張しており、その際立った独自性と優越性は、まさに自然を変革し、社会化する

能力にかかっている」（オートナー、1972；66 [筆者訳]）とオートナーは論じた。

この見解は、エリアーデの「聖なるもの」についての解釈にもみられる。つまり、過去の宗教研究では、宗教の起源を、常に人間の知恵から生まれたものとして理解するのが研究者の一般的な認識である。換言すれば、それは自然の束縛から脱却しようとする人間の知恵の結晶であり、文化が自然より優れている証拠である。

では、なぜ女性は文化より自然に近いと見られているか。この点に関して、オートナーは以下三つの原因を挙げた（オートナー、1972；66－74）。

1. 女性の生理機能が自然に近いと見なされること
2. 女性の社会的役割が自然に近いと見られること
3. 女性の心理構造（psyche）が自然に近いと見なされること

この三つの原因に関し、彼女が最も強調したのは、女性の社会的役割が自然化されているというポイントである。女性の社会的役割として挙げられた最も普遍的な例は子育てである。すなわち、子育てを例に挙げることで、父親より母親が子供と親しい関係であることが示される。「女性は自分の存在の中から自然的に物事を創造するのに対し、男性は人工的に、つまり文化的手段を通して、そして文化を維持するような方法で自由に、あるいは強制的に物事を創造する」（オートナー、1972；69 [筆者訳]）。そして、子供が出生した後、母親と子供の自然的な絆により、女性は子育てから家庭内のすべての家事を一人で負担していく。こうした思想の輪廻を、オートナーは「家庭的な循環（domestic circle）」として定義した（オートナー、1972；70 [筆者訳]）。そして、この「家庭的な循環」こそ、女性が自然に近いという見方に最も貢献する原因だろうと、オートナーは論じた。

## 2. 男性中心主義をもとにした宗教研究―クライストからの批判

「第二期フェミニズムで何よりも重要視されたのは、男性理論の呪縛に封じ込められないような、女性の生身の体験である」（大越、1996；10）。それとともに、宗教研究における女性に対する無意識的暴力の表現は、女性自身が知らず知らずのうちに形成していた男性中心の研究視点にあるという議論もあった。

この点に関しては、フェミニストである歴史学者の C.P.クライストは、“Mircea Eliade and the Feminist Paradigm Shift”（1991）という論文で、今までの宗教研究はすでに男性の権威から立ち上がったものであり、そうした罠を基にした学問は、無意識的に女性に対する暴力を振りまいているのではないかと論じた。そうした罠を批判するために、彼女は二つの例を挙

げた。

**①ヘシオドスの宗教研究への批判**

まず、クライストは、収集と狩猟という二つの方式で生命を維持した旧石器時代の人々の生活様式について語った。当時、小さなコミュニティが形成され、食料を収集する仕事を担当した女性は、小さなコミュニティでは家族に安定した食料源を提供できるため、ハンター役を果たす男性より地位が高い可能性がある。同時に、小さな社会モデルは生産を非常に重視するので、子供を産むことができる女性のイメージは石や動物の骨に刻まれた。この女性崇拝は旧石器時代の金星と呼ばれている。さらに、農業生産が徐々に確立されていった新石器時代にあっても、女性崇拝を示すいくつかの断片によれば、女性の社会的地位と宗教的力はさらに強化されるかもしれないと、クライストは論じた。この問題に関して、多くのフェミニストは家父長制主義の普遍性に疑問を呈している。その証拠の一つは、旧石器時代と新石器時代（先史時代）に存在していた女神象徴主義である。もし女神象徴主義が存在し、さらに女性の宗教的かつ社会的地位と直接的なつながりを持っている場合、家父長制の普遍性は完全に揺らぐであろう。「書面による記録がないために先史時代と呼ばれる旧石器時代および新石器時代の時代に由来する女神の象徴を裏切り、フェミニストはこれらの時代により大きな注意を払うよう主張し始めた」（クライスト、1991；572)。

先史時代の人間の文明は書面による記録を持っていないため、多くの歴史家はその時代の歴史の信憑性と客観性に疑問を呈していた。無論、歴史家たちは、「過去の記録からのほんの少数の書面による記録だけが生き残ったことに同意するだろう。つまり、ほとんどではないにしても、歴史家たちは過去に対する私たちの見解は完全でも偏りがないもないと認めるだろう」（クライスト、1991；573)。にもかかわらず、歴史家たちはまた新たな口実を作った。彼らは「書面による記録がない人類の歴史が理解できないままでなければならないと主張した」（クライスト、1991；573)。つまり、物理的なデータを文字に通訳するプロセスは必ず主観的であるため、結果、書面による記録は物理的な真実より真実に近いという結果に落ち着いた。

しかし、これに対し、クライストは自身の疑問を提起した。ここで彼女は、古代ギリシャの宗教を研究するヘシオドス(Hesiod)の権威に対する学者ジェーン・ハリソンの質問を引用した。ヘシオドスの研究では、女神の権利は弱められ、ゼウスのような男性の神の権利は支配的であると考えられた。しかし、ジェーン・ハリソンは古代ギリシャの多数の既存の作品の研究を通して女神に関するヘシオドスの諸研究の間で大きな違いがあることを発見した。ヘシオドスの研究は古代ギリシャの宗教研究における画期的な成果であると考えられ

ているが、その権威が疑問視される面もある。彼が権威になることができた最も重要な理由は、彼の研究の大部分が書面による記録を通して保存されたからである。そしてクライストによれば、ヘシオドスの例は男性中心主義に支配された学術の一つのパターンである。彼女は「一人の男性の権威が、過去に遡ることのない終わりのない連鎖において、別の男性の権威によって引用されている。外部者(outsiders)の証言（女性による一次および二次テキストを含む）および権威側の言葉に合わない証拠は無視されている」（クライスト、1991；574 [筆者訳])と示唆した。

**②エリアーデの宗教研究への批判**

もう一つの例は宗教学の巨匠エリアーデの例である。クライストはエリアーデの研究に根ざした男性的な考えは、彼が宗教の歴史における女性と女神の重要性を十分に理解することを不可能にすると信じている。これを実証するため、彼女はエリアーデの代表作の一つである『世界宗教史』を引用した。エリアーデの多大な影響により、彼が行った初期の人類文明における宗教に関する研究は、繰り返しフェミニストたちによって引用されたが、彼の考えに根ざしている男性中心主義の思想は無視された。そして、この矛盾が見つかるほど、宗教研究における無意識的暴力の根深さを再考していかなくてはならないということを意識した。クライストはこの論文で、エリアーデの最も代表的な三つの学術的仮定を引用し、議論を行った。ここでは、クライストが論じた彼の最初の仮説に潜在している男性中心主義の問題について議論したいと思う。

エリアーデの最も代表的な研究の一つは、聖なるものに関する研究である。エリアーデにとっての聖なるものは意識の塊である(クライスト、1991；577)。生物学的関連研究によると、人間と動物の最も初期の違いは直立二足歩行の出現である。エリアーデは、最も初期の人間が四次元の空間的意識を発達させたと信じていた。そして、そうした空間意識は多くの宗教的象徴に反映されていた。それゆえ、彼は最も初期の人間が聖なるものの存在を認識していたと信じた。しかし、エリアーデが考える聖なるものの概念は二項対立の理論により構築されたものであるとクライストは示唆した。

> 神聖な経験を通して、人間の心は、それ自体が現実の、力のある、豊かな、そして意味のあるものの流れとして現れることと、そうした品質を欠いている混沌とした危険な物(the chaotic and dangerous flux of things）の違いを認識した(クライスト、1991；576)。

クライストによると、エリアーデのこの認識は、「聖なるものは心身の連続ではなく、心

の中に位置し、混沌とした危険な物の反対側にある」（クライスト、1991；576)というささやかなプラトニズムを掲示した。つまり、身体と心の区別を、無秩序と秩序という二つの意識と結びつけた。こうした二項対立的思考は、その後フェミニズムの研究の一つの大きなテーマとなった。しかし、クライストは、「フェミニストたちは人生の条件の一つとしての変化を受け入れるべきであり、そして変化を危険と混沌と同等に考えるのは、家父長的哲学と神学の典型である」（クライスト、1991；577)と主張した。

つまり、この議論を通じて、クライストはエリアーデの宗教研究に潜在した二項対立の考えを指摘し、こうした考えを元にした男性中心主義の学問的視点は、フェミニストたちがエリアーデの研究を引用する過程で形成した女性に対する暴力であると示唆した。ここで示唆された暴力は、すでに宗教ではなく、宗教研究自体による女性に対する暴力である。

最終的に、クライストは「宗教の歴史は完全に歴史的でなければならない、女性と男性の力を理解しなければならない……家父長制は普遍的ではない……男性中心的な文字の情報源は過去についての唯一のまたは最も信頼できる証拠を提供するものとして信頼されるべきではない」（クライスト、1991；588)と結論した。しかし、クライストが意識していなかったのは、「女性と男性」、即ち男女の性差を強調すればするほど、女性に対する新たな暴力も形成されていくことである。フェミニズム研究者の大越愛子は、これを「構築的暴力」と呼ぶ。第三期のフェミニズムの到来と共に、こうした暴力も暴かれていた。

### 3．女性中心主義をもとにした宗教研究—クライストへの批判

オートナーにせよ、クライストにせよ、男性中心主義とその原因になる二項対立の暴力性を意識すればするほど、実際のところ、これが新たな暴力になってしまう。「男性中心の文化や社会、主体形成の虚構性を暴き、それに異議申し立てをしていく果敢な底力をもつフェミニズムが、男性中心を転倒させた女性中心のイデオロギーの形成の自己矛盾に気づかないわけがない」（大越、1996；11)。つまり、男性中心主義により形成された暴力性を暴くことにより、二項対立の思想がさらに強化された。女性に力を持たせることによって徐々に確立された女性中心主義は、ある意味では、「女性」というイメージを固定化する手段ではないかという批判もあった。女神崇拝の研究が重視されていけばいくほど、こうした矛盾も明らかにされていた。したがって、男性中心主義の角度から、女性中心主義へ移行する新たな暴力である。

女性中心主義の確立は先史時代の母権社会の発見と女神崇拝に関する研究にさかのぼることができる。その中では、母権に関する最も初期の、最も権威のある研究は、1861 年にドイツ人学者バハオーフェンが発表した『母権論』の研究である。「彼はギリシア神話の深

層をひらくことによってついに、父権社会の前に母権社会が存在したとの学説を提起するに至った」（石塚、1995；158）。

バハオーフェンの研究に対し、フェミニストのシンシア・エラーは、“Matriarchy and the Volk”という文章の中でバハオーフェンの研究を紹介し、それを批判した。エラーにより、バハオーフェンは前史時代の神話や宗教的な儀式で女性崇拝の象徴的なシンボルを多数使用することによって彼の理論を証明した。ヘーゲルによる物質と精神の間の区別を引き合いに出すことにより、彼は前史時代に使われた象徴的なシンボルを、男性と女性の二つのカテゴリーに分けた。女性は物質を表し、男性は精神を表す。同時に、女性はまた地球、夜、左、受動、東、月などの象徴を持っているが、男性はその反対側の象徴を表す（Eller, 2013；188－211）。こうしてみると、男性と女性の間の二項対立の概念は、バハオーフェンの研究においてさらに深まっていることがわかる。たとえ彼が母権社会の存在を主張したとしても、「女性らしさ」を強調するのは彼の研究に深く根ざしている問題ではなかろうか。しかし、多くのフェミニストの研究者たちは、彼が主張する女性中心主義に魅了されていた。その中の一人は、本稿で取り上げた神学者のクライストである。

> マーリン・ストーン（「神が女性であったとき」、1976）、リアン・アイズラー（「聖杯と刀剣」、1987）、マリア・ジンブタス（「女神の言語」、1989）、キャロル・クライスト（「女神の生誕」、1997）のような擁護者たちは、女神を崇拝する時代とその普遍的な家父長制革命における没落の長い説明を提供した（Eller, 2013；188－211）。

しかし、フェミニズムの発展に伴い、学者たちは徐々に女性中心主義の問題を認識してきた。研究者のヨアン・バンベルガーによる論文「母系の神話：なぜ原始社会において男性が支配するのか」（2006）（“The Myth of Matriarchy: Why Men Rule in Primitive Society”）では、彼女は母権論に疑問を投げかけている。バンベルガーにより、バッハオーフェンが提案した女性像は、「ロマン化」された女性のイメージであり、このようなイメージは、独立かつ自由であると見なされる現代の女性像とは異なるものであると考えられている（Joan Bamberger, 2006；265）。

この時点では、宗教研究における女性らしさへの定義により進化した男女二元論にもたされた、女性に対する暴力性も徐々に問題として意識化され、明らかにされていったことが分かった。

## Ⅲ．結び

本稿では、宗教研究における男性中心主義に関する 20 世紀のフェミニズム研究を再考した。まず、男性中心主義の出現を見直した。オートナーの批判を通して、男女の二項対立という考えを深めることによってもたらされた男性中心主義の強化を見ることができるだろう。そして、本稿の核心の議論になっている神学者のクライストの批判を通して、宗教研究における潜在した男性中心主義によって引き起こされた暴力の問題をさらに明らかにした。しかし、先史時代の女神崇拝の束縛もまた、新しい暴力、つまり女性中心主義の暴力に陥る可能性があることに注意すべきである。女神崇拝を信仰した先史時代の存在を証明しながら、「女性」を定義していくフェミニストたちの立場を再考する必要もあるだろう。女性への定義ということ自体も、女性に対する新たな暴力となる可能性がある。この点についての考察は、今後の課題としたい。

## Ⅳ．参考文献

大越愛子『フェミニズム入門』(1996)、ちくま新書

大越愛子『フェミニズム的転回』(2001)、白澤社

大越愛子『越境するジェンダー研究』(2010)、「構築的暴力に抗するフェミニズム」、明石書店

大貫挙学『性的主体化と社会空間』(2014)、インパクト出版社

川橋範子、小松加代子（編著）『宗教とジェンダーのポリティクス—フェミニスト人類学のまなざし』(2016)、昭和堂

C.T.テーハンティ（著)、菊地恵子・吉原令子・我妻もえ子（訳)『境界なきフェミニズム』（2012)、法政大学出版局

Bamberger, John(1974). “*The Myth of Matriarchy: Why Men Rule in Primitive Society*”, Rosaldo, M. and Lamphere, L. (orgs.) *Women, Culture and Society*. L. Stanford, University Press: pp.263-281.

Christ, Carol Patrice (1991). “Mircea Eliade and the Feminist Paradigm Shift”, Darlene Juschka (Eds.) *Feminism in the Study of Religion.* Continuum: pp.571-589.

Delphy, Christine (1993). “Rethinking Sex and Gender”, Darlene Juschka (Eds.) *Feminism in the Study of Religion.* Continuum: pp.411-422.

Eller, Cynthia “Matriarchy and the Volk”, *Journal of the American Academy of Religion*, Volume 81, Issue 1, 1 March 2013, Pages 188–221, https://doi.org/10.1093/jaarel/lfs105

Fox, Bonnie J.(1998).“Conceptualizing “patriarchy”, Darlene Juschka (Eds.) *Feminism in the*

*Study of Religion.* Continuum: pp.314-410.

Ortner, Sherry (1972). “Is Female to Male as Nature Is to Culture”, Darlene Juschka (Eds.) *Feminism in the Study of Religion.* Continuum: pp.61-79.